羅生門

関連入試1（二〇一四年・京都産業大学）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

〔芥川龍之介は大正五年末から約二年間、横須賀の海軍機関学校で嘱託教官として英語を教えたことがあり、この小説にはその時の芥川自身の経験が反映されている。〕

秋の末か冬の初めか、その辺の記憶ははっきりしない。とにかく学校へ通うのにオオヴァ・コオトをひっかける時分だった。午飯のテエブルに就いた時、ある若い武官教官が隣に坐っている保吉にこういう最近の椿事を話した。――つい二三日前の深ァコウ、鉄盗人が二三人学校の裏手へ舟を着けた。それを発見した夜ィケイ中の守衛は単身彼らを逮捕しようとした。ところが烈しい格闘の末、あべこべに海へ抛りこまれた。守衛は濡れ［甲］になりながら、やっと岸へ這い上がった。が、勿論盗人の舟はその間にもう沖の闇へ姿を隠していたのである。

「大浦という守衛ですがね。莫迦莫迦しい目に遇ったですよ。」

武官はパンを頬張ったなり、苦しそうに笑っていた。

大浦は保吉も知っていた。〔　①　〕守衛は何人か交替に門側の詰め所に控えている。そうして武官と文官とを問わず、教官の出入りを見るたびに、挙手の礼をすることになっている。保吉は敬礼されるのも敬礼に答えるのも好まなかったから、敬礼する暇を与えぬように、詰め所の前を通る時は特に足を早めることにした。が、この大浦という守衛だけはヨウ易に目つぶしを食わされない。第一詰め所に坐ったまま、門の内外五六間の距離へ絶えず目を注いでいる。だから保吉の影が見えると、まだその前へ来ないうちに、ちゃんともう敬礼の姿勢をしている。こうなれば宿命と思うほかはない。保吉は［a］観念した。いや、観念したばかりではない。このごろは大浦を見つけるが早いか、響尾蛇に狙われた兎のように、こちらから帽さえとっていたのである。〔　②　〕

それが今聞けば盗人のために、海へ投げこまれたというのである。保吉はちょいと同情しながら、［b］笑わずにはいられなかった。

すると五六日たってから、保吉は停車場の待合室に偶然大浦を発見した。大浦は彼の顔を見ると、そういう場所にもかかわらず、［c］姿勢を正した上、相変わらずェゲン格に挙手の礼をした。〔　③　〕

「君はこの間――」

少時沈黙が続いた後、保吉はこう話しかけた。

「ええ、泥坊を摑まえ損じまして、――」

「ひどい目に遇ったですね。」

「幸い怪我はせずにすみましたが、――」

大浦は苦笑を浮かべたまま自ら嘲るように話し続けた。

「なに、無理にも摑まえようと思えば、一人ぐらいは摑まえられたのです。しかし摑まえてみたところが、それっきりの話ですし、――」

「それっきりというのは？」

「賞与も何も貰えないのです。そういう場合、どうなるという明文は守衛規則にありませんから、――」

「職にオジュンじても？」

「職にオジュンじてでもです。」〔　④　〕

保吉はちょいと大浦を見た。大浦自身の言葉によれば、彼は必ずしも勇士のように、一死を賭してかかったのではない。賞与を打算に加えた上、捉うべき盗人を逸したのである。しかし――保吉は巻煙草をとり出しながら、A出来るだけ快活に頷いてみせた。

「なるほどそれじゃ莫迦莫迦しい。危険を冒すだけ損のわけですね。」

大浦は「はあ」とかなんとか言った。そのくせB変に浮かなそうだった。

「だが賞与さえ出るとなれば、――」

保吉はやや憂鬱に言った。

「だが、賞与さえ出るとなれば、だれでも危険を冒すかどうか？――そいつもまた少し疑問ですね。」

大浦は今度は黙っていた。が、保吉が煙草を啣えると、［d］彼自身のマッチを擦り、その火を保吉の前へ出した。保吉は赤あかと靡いた焔を煙草の先に移しながら、［e］口もとに動いた微笑を悟られないように嚙み殺した。

「ありがとう。」

「いや、どうしまして。」

大浦はさりげない言葉とともに、マッチの箱をポケットへ返した。しかし保吉は今日もなおこの勇ましい守衛のC秘密を看破したことと信じている。あの一点のマッチの火は保吉のためにばかり擦られたのではない。実に大浦の武士道を冥々の裡に照覧し給う神々のために擦られたのである。。

（芥川龍之介「保吉の手帳から――勇ましい守衛」）

問一　傍線部ア～オと同じ漢字を使うものを、次の各群から一つずつ選べ。

ア　1　コウ一点　2　国際コウ献　3　親コウ行　4　自力コウ生　5　コウ織選挙法

イ　1　大雨ケイ報　2　ケイ蒙思想　3　ケイ約書　4　ケイ油　5　ケイ務所

ウ　1　歌ヨウ曲　2　ヨウ疑者　3　ヨウ菓子　4　ヨウ魚場　5　ヨウ鉱炉

エ　1　ゲン文一致　2　時ゲン立法　3　戒ゲン令　4　ゲン米茶　5　手加ゲン

オ　1　ジュン滑油　2　血液ジュン環　3　ジュン位　4　ジュン回図書館　5　ジュン教者

問二　「保吉ははっきり彼の後ろに詰め所の入口が見えるような気がした。」という文を本文の［　①　］～［　④　］のいずれかに挿入するとすれば、最も適切な箇所はどれか。一つ選べ。

問三　空欄甲に入る漢字として最も適切なものを一つ選べ。
1　烏（がらす）　2　鼠（ねずみ）　3　髪　4　衣（ぎぬ）　5　雑巾（ぞうきん）

問四　空欄a・b・c・d・eに入る言葉として最も適切なものを一つずつ選べ（それぞれ一回に限り使用可）。
1　急に　2　ぴたりと　3　やはり　4　思わず　5　とうとう

問五　波線部A「出来るだけ快活に」とあるのはなぜか。最も適切なものを一つ選べ。
1　大浦の言い分は信じにくいものだったが、一応信じるふりを装う必要があったから。
2　保吉はこの学校の軍隊式の雰囲気が好きではなかったが、それを守衛の大浦に気づかれては都合が悪いから。
3　対人関係においては、どのような場合にあっても、波風を立てぬように振る舞うことが礼儀に適（かな）うことだから。
4　相手のどのような主張でも受け入れる保吉の御都合主義的な人柄を、作者が描こうとしたから。

問六　波線部B「変に浮かなそうだった」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを一つ選べ。
1　盗人を取り逃がした自分の不首尾のせいで、心の底から打ちひしがれていたので。
2　賞与の有無が原因で、犯人を捉えられなかったことが学校当局に知られることを期待しているので。
3　泥坊を摑まえ、自分の有能さを示す千載一遇の機会を逃したことを悔やみきれないので。
4　賞与が貰えないゆえに全力を尽くさなかったというまずい言い訳を口にしてしまったので。

問七　波線部C「秘密」とは何を指していると考えられるか。最も適切なものを一つ選べ。
1　賞与が貰えないということで、盗人を力を尽くして捉えようとしなかったが、今ではそれを悔やんでいること。
2　自分が、守衛規則を杓子（しゃくし）定規に守っているだけの、無能な人間であることをあからさまにしたくないこと。
3　危険を顧みず盗人を捉えようと一人で立ち向かった勇敢な行為を、実は誇りに思っていること。
4　誰もやりたがらず、待遇も悪い仕事だが、実は組織の中で最重要な業務だとひそかに自認していること。

問八　本文の内容と合致するものを一つ選べ。
1　大浦が保吉の煙草にマッチを擦ったのは、保吉の言葉が大浦の行為の称賛すべき点を指摘したからである。
2　大浦が賞与が出ないことを理由にして、盗人をわざと摑まえなかったのは事実その通りである。
3　大浦は教官と異なり夜間勤務の守衛には賞与が出ないことに、日頃から不満を抱いていたので、つい口がすべった。
4　保吉は、大浦が盗難事件のおり、守衛の業務をまっとうしなかったことを責めている。

問九　芥川龍之介の作品を一つ選べ。
1　『仮面の告白』　2　『真空地帯』　3　『舞姫』　4　『河童（かっぱ）』　5　『それから』

【解答】

問一　ア　4　イ　1　ウ　2　エ　3　オ　5

問二　③

問三　2

問四　a　5　b　3　c　2　d　1　e　4

問五　1

問六　4

問七　3

問八　1

問九　4

【解説】

問五　波線部Aの前の「しかし」から、保吉が大浦の言葉をそのまま信じてはいないことをとらえる。保吉は大浦の内なる「武士道」を見破っていたのである。

問六　問五で見たように、保吉は大浦の言い分を信じていないが、信じるふりをして快活にうなずき、「なるほど…」と同調して見せた。「そのくせ」大浦は「変に浮かなかった」のだから、大浦が沈みこんでいる理由は自分の言い訳に関することである。1は「心の底から打ちひしがれていた」が「変に浮かなそうだった」という表現に合わない。

問七　保吉は、大浦の「賞与も何も貰えない」から泥棒をつかまえなかったという言葉が真実ではなく、実際には大浦は賞与が貰えないと知りながらも、内なる「武士道」によって行動したのだということを見破ったのである。

問八　「賞与さえ出るとなれば、だれでも危険を冒すかどうか？――そいつもまた少し疑問ですね」という保吉の言葉は、大浦の言い訳が事実ではないと気づきながらも、その言い訳を尊重しつつ大浦の行動を評価する言葉である。その言葉が自身の尊ぶ「武士道」に従い行動した大浦の心に響いたため、大浦は保吉の煙草に火をつけたのである。

羅生門
関連入試２（二〇一三年・二松学舎大学）

次の文章を読んで、設問に答えよ。

〔この小説は、芥川龍之介の『戯作三昧』の一部である。江戸時代の文学者・滝沢馬琴が、中国の古典文学『水滸伝』をどのように踏まえながら、自身の『南総里見八犬伝』を作り上げてゆくべきか、苦悶している。ある日、親しい画人・渡辺崋山が馬琴のもとに訪ねてきた。典拠となる先人の作品と、自身の創作する作品との関わりについて、馬琴と崋山が語り合う。〕

そこへ折よく、久しぶりで、崋山渡辺登が尋ねて来た。袴羽織に紫の風呂敷包みを小脇にしている所では、これは［あ］借りていた書物でも返しに来たのであろう。

馬琴は喜んで、この親友を［い］玄関まで、迎えに出た。

「今日は拝借した書物を御返却かたがた、御目にかけたいものがあって、参上しました。」

華山は書斎に通ると、［う］こういった。見れば風呂敷包みの外にも紙に巻いた*絵絹らしいものを持っている。

「御暇なら一つ御覧を願いましょうかな。」

「おお、［え］、拝見しましょう。」

崋山はA<u>ある興奮に似た感情を隠す</u>ように、［お］わざとらしく微笑しながら、紙の中の絵絹を披いて見せた。絵は*蕭索とした裸の樹を、遠近と疎に描いて、その中に*掌を拊って談笑する二人の男を立たせている。林間に散っている黄葉と、*林梢に群がっている*乱鴉と、――画面のどこを眺めても、うそ寒い秋の気が動いていない所はない。

馬琴の眼は、この㋐<u>タンサイ</u>の*寒山拾得に落ちると、次第にやさしい潤いを帯びて輝き出した。

「何時もながら、結構な御出来ですな。私は*王摩詰を思い出します。*食随二鳴磬一巣烏下、行踏二空林一落葉声という所でしょう。」

「これは昨日描き上げたのですが、私には気に入ったから、御老人さえよければ差上げようと思って持って来ました。」

崋山は、鬚の痕の青い顋を撫でながら、満足そうにこういった。

「勿論気に入ったといっても、今まで描いたものの中ではという位な所ですが――とても思う通りには、何時になっても、描けはしません。」

「それはありがたい。何時も頂戴ばかりしていて㋑<u>キョウシュク</u>ですが。」

馬琴は、絵を眺めながら、呟くように礼をいった。未完成のままになっている彼の仕事の事が、この時彼の心の底に、何故かふと閃いたからである。が、崋山は崋山で、やはり彼の絵の事を考えつづけているらしい。

「古人の絵を見る度に、私は何時もどうしてこう描けるだろうと思いますな。木でも石でも人物でも、皆その木なり石なり人物なりになり切って、しかもその中に描いた古人の心もちが、㋒<u>ユウユウ</u>として生きている。あれだけは実に大したものです。まだ私などは、そこへ行くと、子供ほどにも出来ていません。」

「古人はB<u>後生恐るべし</u>といいましたがな。」

馬琴は華山が自分の［Ⅰ］ばかり考えているのを、妬ましいような心もちで、眺めながら、何時になくこんな諧謔を弄した。

「それは後生も恐ろしい。だから私どもは唯、古人と後生との間に挟まって、身動きもならずに、押され押され進むのです。尤もこれは私どもばかりではありますまい。古人もそうだったし、後生もそうでしょう。」

「如何にも進まなければ、すぐに押し倒される。するとまず一足でも進む工夫が、肝腎らしいようですな。」

「さよう、それが何よりも肝腎です。」

主人と客とは、彼ら自身の語に動かされて、暫くの間口をとざした。そうして二人とも、秋の日の静な物音に耳をすませた。

「『八犬伝』はあいかわらず、捗がお行きですか。」

やがて、崋山が話題を別な方面に開いた。

「いや、一向捗どらんで仕方がありません。これも古人には及ばないようです。」

「御老人がそんな事をいっては、困りますな。」

「困るのなら、私の方が誰よりも困っています。しかしどうしても、これで行ける所まで行くより外はない。そう思って、私はこの頃C<u>『八犬伝』と討死の覚悟をしました</u>。」

こういって、馬琴は自ら恥ずるもののように、苦笑した。

「たかが戯作だと思っても、そうは行かない事が多いのでね。」

「それは私の絵でも同じ事です。どうせやり出したからには、私も行ける所までは行き切りたいと思っています。」

「御互に討死ですかな。」

二人は声を立てて、笑った。が、その笑い声の中には、二人だけにしかわからないある寂しさが流れている。と同時にまた、主人と客とは、ひとしくこの寂しさから、一種の力強い興奮を感じた。

（芥川龍之介『戯作三昧』による）

（注）＊絵絹　日本画を描くのに用いる平織りで薄地の絹織物。
＊掌を拊って　手をうって。
＊林梢　林のこずえ。
＊蕭索　もの寂しいさま。うらぶれた感じのするさま。
＊乱鴉　乱れ飛ぶカラス。
＊寒山拾得　唐代の浙江・天台宗の寺に居たとされる寒山・拾得という二人の風狂の僧。後世、禅画の画題とされた。

＊王摩詰（おうまきつ）　王維。唐代の詩人。摩詰は字（あざな）。画家としても優れ、後世、文人画の祖とされた。
＊食随二鳴磬一巣鳥下、行踏二空林一落葉声（しょくはめいけいにしたがいそうとうくだり　ゆいてくうりんをふめばらくようこえあり）　王維（王摩詰）の詠んだ詩の二句。

問一　傍線部㋐〜㋒の片仮名の部分を漢字で記せ。

問二　空欄［あ］〜［お］に入る最も適当な語を、次の①〜⑤のうちからそれぞれ一つ選び、番号で答えよ。ただし同じ番号は重複して使えない。
①　さっそく　②　わざわざ　③　やや　④　はたして　⑤　おおかた

問三　傍線部A「ある興奮に似た感情」とあるが、それはどのような「感情」か。本文中の語句を用い、句読点を含めて三十字以内で記せ。

問四　空欄［Ⅰ］に入る三字の言葉を、本文中から抜き出せ。

問五　傍線部B「後生恐るべし」とあるが、その説明として最も適当なものを次の①〜⑤のうちから一つ選び、番号で答えよ。
①　後の時代の評価を考え、謙虚にするのがよいということ。
②　後の影響が大きいので、お願いだから辞めて欲しいということ。
③　死んだ後の世界は不可思議なので、恐れるのが当然であるということ。
④　自分より後に生まれた者の可能性は、畏敬しなければならないということ。
⑤　自分より後に生まれた者は何をするか分からないので、恐ろしいということ。

問六　傍線部C「『八犬伝』と討死の覚悟をしました」とあるが、「覚悟」の内容を、句読点を含めて二十五字以内で記せ。

問七　本文の内容に合致するものを、次の①〜⑤のうちからすべて選び、番号で答えよ。
①　自身の作品の創作に行き詰まりを感じていた馬琴は、同じく先人の作品を踏まえて創作活動を行う崔山が、いかに古人に向き合っているのかを知りたく思った。
②　崔山は、馬琴同様、古人の作品をそのまま踏襲することこそが、表現者としてもっとも重要なことであると考えている。
③　崔山は、古人に及ばないと感じつつ、自身の絵画に満足感を得ていないわけではない。
④　馬琴と崔山は、共に、それぞれの作品の創造に際して、行けるとこまで行き着く覚悟を決めている。
⑤　馬琴と崔山は、共に、古人よりも、むしろ後生を尊重する覚悟を決めている。

【解答】

問一　㋐　淡彩　㋑　恐縮　㋒　悠々（悠悠）

問二　あ　⑤　い　②　う　④　え　①　お　③

問三　（例）昨日描き上げた絵が気に入ったので、馬琴に見せたいという感情。（30字）

問四　絵の事

問五　④

問六　（例）生涯をかけて作品と向き合い、完成を目指す覚悟。（23字）

問七　①・③・④

【解説】

問三　「御目にかけたいものがあって、参上しました」「一つ御覧を願いましょうかな」から、崋山が馬琴に何かを見せたくてうずうずしていることが読み取れる。その何かとは「昨日描き上げた」絵で、自分でも「気に入った」ものである。

問六　傍線部C直前の「行ける所まで行くより外はない」という決意の言葉に着目する。また、「討死」という言葉から、自分の命＝人生を引き換えにしても作品を完成させるという覚悟を読み取る。

問七　①は、リード文に「滝沢馬琴が、中国の古典文学…踏まえながら…作り上げてゆくべきか、苦悶している」とあり、冒頭に「そこへ折よく」とあることに着目する。その後で二人が先人の作品と自身の作品との関わりについて語り合っていることから、①は適当。②は「古人の作品をそのまま踏襲する」が誤り。③は、崋山が「私には気に入ったから」と馬琴に絵を見せているのに合う。④は、馬琴と崋山がともに「行ける所まで行くより外はない」「私も行ける所までは行き切りたい」と語っているのに合う。⑤は「古人よりも、むしろ後生を尊重する」が誤り。